

弔いの現場訪ね歩く

311次世代塾第2期第2回講座

仮埋葬地や安置所視察

東日本大震災の伝承と防災啓発の担い手育成を目指し、河北新報社などが運営する通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」第2期の第2回講座が19日あった。大学生ら受講生約100人は仙台、東松島両市、宮城県利府町を訪れ、震災直後、多数の犠牲者向き合った現場の混乱と悲しみの証言に耳を傾けた。東松島市では土葬による

仮埋葬が行われた大塩地区の跡地や旧JR野蒜駅周辺などを訪れた。同市の佐々木寿晴防災課長は「記録と記憶は伝えていかななくては

とを
ちの
地の
守る



東松島市野蒜地区の慰霊碑の前で佐々木課長（右）らの説明を聞く受講生

ならない」と力を込めた。

利府町では、当時、遺体安置所の一つだった県総合運動公園（グランディ21）の総合体育館を訪問。安置に携わった葬祭業「清月記」（仙台市）の西村恒吉業務

部長（45）は「床一面にひつぎが並び、手厚く弔えない状況が衝撃的だった」と振り返り、「大規模災害では多数の遺体が発生するのが現実。現実を直視する覚悟が必要だ」と強調した。

受講生らは、仙台市が震災遺構として公開する旧荒浜小と、深沼海水浴場（い

ずれも若林区荒浜）も視察。校舎2階まで押し寄せた津波の脅威を学び、慰霊碑では犠牲者の冥福を祈った。

津波で泥やがれきが押し寄せた専能寺（仙台市宮城野区蒲生）では、足利一之住職（51）が「昼夜を問わず葬儀場を駆け回り遺族と泣

きながら犠牲者を送った」と証言。「震災が人ごとではなく、自分の身近なことだ」という意識を持つことが大切だ」と呼び掛けた。

視察後、東北大4年の三浦規義さん（22）は「人の死の話題はなんとなく避けてきたが、今後の災害を考え、

正面から議論するべき時ではないか」と話した。

次世代塾は河北新報社、東北福祉大、仙台市の3者を核とした「311次世代塾推進協議会」が昨年4月に開講。第2期の本年度は年15回の講座のうち、3回程度被災地を視察する。